

■ 書 評 ■

アクチュアル 脳・神経疾患の臨床 識る 診る 治す 頭痛のすべて

慶應義塾大学医学部神経内科教授

鈴木則宏 ● 専門編集

東京大学大学院医学系研究科神経内科学教授

辻 省次 ● 総編集



東京女子医科大学名誉教授 岩田 誠

日常診療の中で、頭痛は誰にでも生ずる最もありふれた自覚症状の1つであるから、どのような診療科の医師であっても、自分が診ている患者が頭痛を訴える機会に出会うことがあるはずである。そのようなときに、自分は頭痛のことはよくわからないからといって、ろくに話を聞くこともせず頭痛専門医に紹介するというのも悪いことではないが、患者側からみれば、頭痛ごときでわざわざ専門医を受診するなんて、と受け取る人は少ないだろう。一方で、頭痛を訴えて受診すると、すぐに頭のCTスキャンやMRI、MRAを撮り、何も異常はありませんといわれ、適切な解決策をみつめてくれる医者にめぐり合うまで、痛む頭を抱えて次々と医者廻りをする患者も少なくない。日常診療の場で今もなお繰り返されているこのような浪費

的医療の根源にあるのは、一般の医師たちの、頭痛診療の重要性に対する認識不足と、頭痛診療に対する勉強不足であるが、そのような事態をきたしたそもそもの原因は、頭痛のメカニズムに対する科学的な教育と、頭痛の診断と治療に関する実践教育が不十分であったことである。

評者は、今から30年以上前、母校の学生に神経内科学の講義を行うことになったとき、それまで1度もなされたことがなかった頭痛の系統講義を始めた。当時は、頭痛の科学的メカニズムはほとんどわかっておらず、病態を十分に説明できないことに、自分ながらもどかしさを感じていた。ここに紹介する『識る 診る 治す 頭痛のすべて』には、その当時の私が、最も求めていた内容が、余すことなく網羅されている。もし、30年前にこのような書物が存在し

ていたなら、評者は躊躇することなく、ここに書かれていることのすべてを、学生たちに伝えようと試みたであろう。そのような教育を受けた学生たちは、卒業後どのような診療科の医師になったとしても、自分の患者が語る頭痛の訴えに耳を貸し、自らの適切な意見を述べたうえで、頭痛診療の専門医に紹介するだろうし、無駄な画像検査の回数は激減するであろう。頭痛診療の専門家だけではなく、あらゆる分野の臨床に携わっている、あるいはこれから携わろうとする、すべての医師・医学生に読んでいただきたい本である。

B 5, 頁 364, 2011 年

定価 9,975 円

(本体 9,500 円 + 税 5%)

[ISBN978-4-521-73438-5]

中山書店刊